



「頼むぞ」の声援を受け、「いざ、出陣！」岸蹴り直前の水上運動会の選手達。湖岸は黒山の人(上、昭和4(1929)年)。ゴール目前に、必死の形相で最後の力漕(下、同年)

創立10周年記念事業として、明治40(1907)年に端艇5隻を建造。それは水上運動会(端艇競漕会)の端緒を開いていくものだった。端艇(ボート)競技は、すさまじい覇気と武勇の気魄をもって、漕手全ての一条乱れぬ動きと、調和のとれた漕力が勝負の鍵。そしてその一体感こそが競漕の醍醐味なのだ。

霞ヶ浦で展開された熱闘は、オリンピックの興奮を見るように人々に大きな感動を与え、地域の名物行事となっていく。今号は水上運動会を追ってみる。

『進修』に登場する水上運動会

本校の歴史を探ろうとすれば、いつも『進修』がその中心的資料となっている。その年度の行事や部活動等の状況が、生徒や教師によってつぶさに叙述されているからだ。明治33年(1900)1月にその第一号が創刊され、その後はほぼ毎年一回発刊されてきた。散逸した号数もあつたが、心ある方々からのご寄贈を得て、今では、そのほとんどを収蔵するまでに至っている。この『進修』を主なる史料とし、今号は水上運動会を辿ってみよう。

前号でふれたように、創立10周年記念事業として、新艇が建造され、艇庫も完成した。以降、ボートレース(端艇競漕)は一大行事となり、それに向けて、生徒達は一心不乱に取り組んでいく。

『進修』第12号(明治41年12月発行)によれば、同年の進修会掲示板には「勇壮なるボートを漕げ 汝海国男子よ 薫風やオール一瞥陽飛ぶ」との檄が貼られ、オールを握らざるものは亀城男子にあらずと、生徒達は日々漕艇を試みていった。整備された端艇の「筑波」「霞」「桜」「鹿島」「香取」はいずれも7人乗り。

『進修』では、7名のポジション(シート)名について、船首に近い方から、船手(じくしゅ)・二番・三番・四番・五番・整調(せいちょう)・舵手(たしゅ)と記している。「船手(Bow、バウ)」は、船首に最も近い漕手。漕手全員の方を向いているので、声をかけて士気を鼓舞したりアドバイスをしたりと、クルーをリードする役割も持ち、技術に長けた者がその任にあたるという。「二番・三番・四番・五番」はミドルクルー(Middle

Crew)と呼ばれ、船手と整調にはさまれた漕手で、船首に近い方は数字が小さい。エンジンルームとも呼ばれ、最も筋力や持久力のある選手が置かれる。「整調」(Stroke、ストローク)は船尾に最も近い漕手。全漕手からオールの動きが見えるので、整調のピッチが漕手全体のピッチを秩序立てていく役回りで、経験豊富な者が適任とされる。「舵手」(Cox、コックス)は最後尾で前向きに乗り、最短距離で航走できるように舵を取る選手。但し、舵を切ると水の抵抗が大きくなるので、各クルーが、左右バランスよく漕げるよう指示することが重要。その他、ピッチ(ペース)を考えてクルーに指示したり(舵手の指示は絶対である)、タイムを計ったり、漕手が力を100%発揮できるように心理面でリードしたりすることも求められる。それゆえコックスは艇長・作戦参謀・心理学者等の多様な側面を持った存在と言えよう。さらには陸に上がっても、イベントを入れたりして、クルーを引き締めつつ、盛り上げるのにも奮闘する「艇のリーダー」なのだ。加えて、少しでも重量を減らすため、小柄な者がうってつけとされている。

ボート競技の魅力

ところでボート競技は「スピード」を争うスポーツ。オールを持ち、艇を漕ぎ進め、他艇より少しでも先にゴールすれば勝ちという、まことに単純明快な競技。そして、レースに勝つためには、個々の高い力量が必要であるばかりでなく、クルー全体(乗艇メンバー)の「息」がぴったり合うことが何よりも大切。バラバラの漕ぎでは一人一人のパワーを生

かすことはできず、艇速(スピード)をアップすることは到底かなわない。それどころか、あらゆる方向に進み、あげくの果てには、沈没の憂き目を被ることもあるかもしれない。つまり、全員の呼吸・意識・動きの全てが揃った時に、初めて艇をトップスピードにまで加速でき、その迫力とスピード感は艇が空を飛んでいく感覚なのだ。もちろん、全員が研ぎ澄まされた集中力は絶対条件であり、その度合い次第で、2・3年の経験の差が埋められ、掴み所のない水が捕まえられるのだ。そのため、ボート競技は「究極の団体スポーツ」とも言われる。

一致団結して戦う一体感や連帯意識の高揚感、そして血たぎる充実感。さらには紫峰筑波を仰ぎつつ、四季の移り変わりを感ずる湖上で、自然と融合して思うがままに漕ぎ渡る爽快感は、「土中生」をボートの「とりこ」にしていった。

熱狂の水上運動会に多数の観客

前号で述べた第1回に続き、第2回水上運動会は翌明治41(1908)年11月に開催された。『進修』第12号(明治41年12月発行)には「薫風渡る頃より間断なく 練磨せしその腕いつかためさん、月明に遠漕せしその雄心いつか示さん」とあり、遠漕を試みて体力錬磨、不屈の精神を涵養し、待ちに待った生徒の様子が窺える。以下、往時の興奮・熱気がそのまま感じ取れるよう原文を活かしつつまとめたい。

天候も川口水神の御恵みか、快晴抜けるような秋空。午前7時30分、開催を告げる煙火一発蒼穹に響くや、五百の健児をはじめ観客が、艇庫前(川口港)に続々とつめかける。万国旗が風に翻り、



水上運動会メインレース「3・4・5年生学年対抗」(上、昭和4年11月) ボート部の艇庫と部員(明治44年10月) 最前列右より二人目が劇作家・随筆家高田保(中12回卒)

はや選手の意気は天を衝くばかり。汽船3隻は、来賓と生徒の観覧船として、汽船善彌丸は審判係用として、それぞれ雇い入れ、午前10時にレース開始。

レースは9回。距離は750m。1・2年は各組対抗競漕。水戸中学選手の競漕や来賓・卒業生・職員混合の競漕も行われるが、何と言つてもメインは3・4・5年生による学年対抗レース。第3選手による競漕から始まり、第2選手、第1選手と、3回のレースが繰り広げられ、生徒の応援合戦はレースを追うことに熱を帯びていく。そして、最高のクライマックス第1選手ともなれば、出発点に向かうクルーに観覧船から「頼んだ」「しかりやれ」「4年、今度は勝て」などの声援を送る。選手達も「今に見よ」との覚悟でオールを握りしめ、日頃鍛えし鉄腕を振るうは今日と、勇みたちたる健児の面影、清き心は香澄の水か、高き気は筑波峰か、その華々しき漕ぎ振りでゴール

を目指す。4年(赤)先行追う、3年(青)、4年艇に迫り、5年(白)やや後より進む。観覧船に到るや声援の声、赤・白・青の旗の動揺、太鼓乱打の響き相和して狂せんばかり。3年応援隊は小舟に乗つての声援。満を持していた5年艇、一気にピッチをあげて3年・4年艇を抜き去り、4年艇を2艇身半引き離してゴール。5年万歳の歓声が観覧船の甲板上から湖上に響き渡る。タイムは3分37秒、4年艇は3秒、3年艇は8秒の遅れでゴール。優勝旗は5年の手に。太陽が西山に傾き、紫雲夕日を浴びて金光を放つなか、優勝クルーが5隻に分乗、艦隊運動を行い、野も山も町も湖も蒼然たる暮色につつまれる頃5隻は艇庫内に収められ、ボートレースは終止符をうつ。

翌年の第3回水上運動会(10月17日開催)では、第3選手・第2選手ともに最下位であった4年生艇が、第1選手レースで雪辱。タイムは4分38秒、5年は遅れること10秒、3年はさらに遅れること15秒(距離が100m程度に伸びたようだ)。一時は意気阻喪していた4年生応援団は、にわかに色めき立って「4年万歳!」の声が響き渡った。(明治43年1月発行『進修』第13号)

とにかく、ボートレースに関する記事は『進修』によく登場する。第15号(明治45年4月発行)では「……こしは端艇建造五周年の記念をも兼ねて、例年よりは、一層盛大に挙行しようといふ目論見だ。……選手擲猛烈な練習は更にも言はず、各級次回またそれぞれ応援歌の練習に声打ち唄しての意気ごみだ。当日、火花は既に暁の空に轟いた。軽雲の徂徠も徐に収まるやうだ。人はみな川口さして急いで行く。……観覧の人は夥しく寄せて来た。

来賓席の賑ひは言ひまでも無い……(抜粋)と盛り上がりぶりをつつる。

第25号(昭和2年1月発行)には、後に茨城大学学長を務めた市村正二氏(中30回卒)の課題選文が掲載されている。「二寸の間、沈黙が続いたかと思ふと何時の間にか、三隻のボートがまのあたりを息もつかずに走り過ぐ。『一、二、一、二』かれた聲を出して調子をとる舵手それに合はせて水に入る。亦が一番だ……なに言だ、ホラそこだ、しかり……。決勝線は近づくと、緑のラストハウイが利いたのか、今一問と離れぬ決勝線前線は赤を追ひこして心地よく線にすべり込んだ。『ドン』と何とも云えぬ底力ある様な言砲で緑は一着の栄を得た」(抜粋)と、ゴールの決定的な場面を活写する。

こうして霞ヶ浦をひかえた土浦中学ならではの水上運動会は、生徒を熱狂させる行事となり、近郷近在から多くの観客を集め、県知事も来臨するような一大イベントになっていった。勝負にこだわる余り、上級生と下級生の間にトラブルを生じたが、生徒たちは休日を利用して、遠漕を試みるなど、前号で書いた幸津校長の端艇建造の意図どおり、心身を鍛え、浩然の気を養っていったに違いない。

30年近く続くも幕を下ろす時が……

大正12(1923)年の関東大震災の時も「ボートは蘇生した何といふ幸福なことである」(主生徒祝せ)海国男子の血は躍る……と、喜びを爆発させて乗り越え、明治・大正・昭和にわたり開催されてきた水上運動会。それもついに幕を下ろす時がくる。昭和10(1935)年を最後とし、河口の護岸工事により、艇庫を失ったためである。同時に端艇部も廃部となったのだ。(了)

余録 追憶

永山正(元本校教諭・大正14年、昭和40年在職)

……ボートレースは、秋の陸上運動会とならんで春の最大の行事で5月の日曜日に催された。霞ヶ浦をもつ土浦中学校としては、最もふさわしくカッコよい若者の祭典で、土浦の名物でもあった。特に祭典といったのは、競技に参加する者は陸上とは違って少なく、大部分の生徒は応援団だからだ。レースは今の土浦港の岸壁で行われ、艇はさくら・つくば・かすみの三隻だった。各組対抗(ボート部除く)、クラブ対抗、地域対抗(通学区でその頃、会が組織されていた。例えば桜川以南の桜南会、石岡の南城クラブとか……。私は南城クラブの顧問だった)そして最後に学年対抗レースがあり、その応援合戦は華やかで物すごかった。学年対抗で5年生が敗れるようなことになると、事は容易ではなく、学年担任にとっては、いずれにしても頭痛の種であった。昭和13年プールの完成によってボート部も廃止になってしまったのは残念な気がする(補足艇庫がなくなり端艇はやむなく手放すことになる。そのため端艇購入積立金をプール建設資金にあてた)。若さを発散するシンボルみたいなだったから。あの頃の艇庫あたりには、霞ヶ浦観光ホテルなどが出現し、レースの行われたコースも立派な岸壁となり、突端にはハイカラなレトロロッジの建物が現れ、付近は野球場、陸上競技場、庭球コートなどのスポーツ施設ができ、湖上にはボートに代わってヨットが霞ヶ浦の花になってしまった。50年の歲月の経過を物語っている……(『進修百年』より)



現在の川口(土浦港)。左側の建物はホテルCANKOH(旧霞ヶ浦観光ホテル、今は震災で営業休止中)。その右隣の木立は川口運動公園(上)。川口運動公園正門(下)